

師匠山本晴樹教授との思い出

歴史学専攻修了

池田 遼一

- ・ここに、私が抱く師匠山本晴樹教授の印象を少し述べてみたい。
- ・御専門の西洋史のみならず幅広く豊富な知識まさに博識。
- ・小柄ではあるが、大きな包容力と優しい笑顔で学生を迎えてくれる。
- ・時にはあつと驚くジョークを交え、会場の空気を和ませてくださる。
- ・論文指導の際には漢字や数字のミスに特に厳しく見逃さない。
- ・研究室は本や雑誌、授業プリントが乱雑状態となっている。
- ・一つのことに興味を持つと、とことんこだわる。

などなど、挙げれば切りがないのでここで止めておくことにする。

ここから思い出を。

歴史が好きだった私が、進学先を決める際の決定打となった要素が、別府大学には古代ローマ史を研究されている先生がいることであつた。「ここしかない」と即決した。いざ、入学して待ちに待つた先生が、当時担当をされていた西洋史概論の授業へ。日本史・東洋史は3号館ホールのため少し余裕があつたが、西洋史は500番

教室のため学生でこつた返した中での講義だつた。先生が入られ、最初に述べられた言葉を今でも鮮明に覚えている。一番後ろに座つていた同期生に、「一番後ろの君、後ろのブラインドを開けてくれないか。数多くある大学の中で海を見ながら講義をできる大学は数少ないからね」と。同期生たちと「えっ？」と後ろを何度か確認したことをこの寄稿を作成するにあたり、昨日のように思い返した。先生の講義のすごいところは、豊富な知識と巧みな話術で学生をその世界に引き込むところである。これを機に成績表で先生から与えられた単位数を数えてみた。合計で40単位を超えていることに自分でも驚いた。

私が一番苦労したことは、先生に名前を覚えて頂くことだつた。各講義後に個別の質問をすることで覚えて頂けるだろう。この考え方が甘かつた。何度お伺いしても「君は、どんなところに関心があるの?」とか「君のその考えは鋭いね」などとどんなに頑張つても「君」なのである。よくよく考えれば、何百・何千人の学生をこれまで相手にされてこられた先生なのだから、仕方がないことではあるのだが。そのため先生が講義ではない時間を見計らい、何回も研究室の扉をノックした。これまでの学生の中で、先生の研究室に足を運んだ回数歴代5位には入るかもしれない。次第に「池田君」しかし次回にはまた「君」と何度も諦めずに訪問した結果、卒業論文を作成する頃には確実に「池田君」と呼んでもらえ、このことが大學生活の中でどんなに嬉しかったか。

大学院に進学し、これまで以上に深い付き合いとなった。大学の卒業時には史学科の同期性が100名位はいただろうが、その中で進学を決意したのは西洋史が3名、日本史が2名であった。論文のための専門性を強化するために美術史の安松教授に指導を仰いだり、好きな映画の知識を深めるために衛藤教授の研究室に足を運んだりと忙しい毎日を送る日々だった。多くの教授にお世話になったが、その所々で「指導教官は山本先生なのですね。いい先生に見てもらっているね。」との話題に必ずなった。先生のお人柄を改めて実感した。2010年に開催された日本西洋史学会第60回大会では、先生のリーダーシップの下、九州各県の名だたる教授陣が集まり会を成功に導かれた。これも偏に先生のお人柄が皆を動かしたのであらう。

大学院を修了した今でも先生とは、毎年お会いする機会を設けて頂いている。特に嬉しかったことは、日本西洋史学会富山大学大会における恐らく最後の発表を聴講することができたことだ。また、先生と40年にわたり大学を支えてこられた利光教授や唯一の同期生である糸山君を交えての飲み会などにも積極的に参加して下さる。先生からの「自分に足りないものは相手から盗み取り、自分なりのアレンジしていく。」との言葉は特に記憶に残り、日々意識して行動している。

そんな先生が今年度をもって第一線を退かれる。利光教授との巧

妙なやりとりを見聴きすることができない（グランプリコンサートの話は今でも笑ってしまう）。先生のあの研究室の風景を見ることができない。本当に寂しい限りである。まだまだ話は尽きないが、40年間も別府大学のためにご尽力された先生である。御指導頂いた我々後人が、先生の意思を受け継ぎ、社会で活躍していくことを誓います。本当に長い間お疲れ様でした。